

説教 「一つの神でありそれぞれの神」 山本 護 牧師
聖書 申命記 25：5～10／ マルコによる福音書 12：18～28

「復活はないと言っているサドカイ派の人々(マルコ 12:18)」とは、最高法院で多数を占める神殿の特権階級で、イエスの十字架刑を先導した大祭司も同派から選ばれる。となると、憎々しげな悪人が思い浮かぶが、実際は波風が立つことを嫌う常識人。

日本の一般教養では「復活はない」し、慣習が支配的なところなどが私たちの社会に似ている。教会は、サドカイ派のような世に建てられている。

サドカイ派の人々は懇懇無礼に(12:19)、復活に関する事柄を問う(12:23)。どんな底意があったのか。ひとつ評判の高いイエスをからかってやるか。彼らは律法的(12:19)な婚姻制度(12:20~22)を用いてイエスをひっかけ、「復活すると妻が七人もいて大騒動」と、嘲笑するつもりだったのか。

「兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない(申命記 25:5)」。

「レビラート婚」と呼ばれるこの婚姻制度は世界の伝統社会で多く見られ、「死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない(25:6)」がために定められている。

嫁はまったく抗えず、娶らされる弟たちも嫌がるが多かったのか、対処の仕方(25:7~10)を想像すると、喜悲劇のような社会秩序である。

イエスは、愚かな権威者たちに対し、「あなたたちは思い違いをしている(12:24,27)」と、二度に渡って指摘している。

「思い違い」の理由の一つは、彼らが「聖書も神の力も知らない(12:24)」こと。そしてもう一つは、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神(12:27)」であること。

前者の意味はどうか。聖書によって「神を知る」ことは、その命に与ることであり、神を知るまで、人間は狭く偏った「思い違い」に閉じこめられたまま。

そして後者はこういう意味か。復活とは、「天使のような命(12:25)」に与ることであり、同時にそれは、アブラハムやイサクやヤコブ(12:26)と同じように、私たちが名を持つ一人の個として、神に対し、神と共に、永遠を生きることなのだ。

イエスは、サドカイ派が重視する正典(旧約聖書のはじめの五書)を引いて復活の根拠を語る。

「死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の箇所、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか(12:26)」。

モーセの書、つまり出エジプト記の「柴」は、何を示しているのだろうか。

モーセは神の山ホレブで、「燃え尽きない柴」を見(出エジプト 3:2)、「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろうか(3:3)」と思った。

モーセは永遠を象徴する「柴」を注視すると、神の声を聞く。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である(3:6)」。

父祖たちも、モーセも、私たちも、「わたしはあなたの父の神である」という声を聞く。

「父の神」は、私たち一人ひとりを造り、一人ひとりを燃え尽きない「柴」の前に召し出す。

現代人は合理的なサドカイ派のようであり、靈魂の不滅を漠然と思う者が存外に多い。だがそれはやがて宇宙生命に吸収されるイメージで、復活とはまるで違う。

アブラハムの神、イサクの神が、キリストによって私の神、あなたの神となる。復活に与った後も私は、神に創造された一人の私なのだ。



《おまけのひとこと》

人(アダム)は土(アダマ)から造られた(創世 2:7) 素材は有機物に還元され 一つにまとめられたり 新たに分離されたり だが「命の素」は神の息(2:7) 個別に吹き入れられており 神秘的合一はない